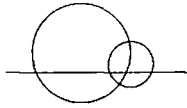


〈霞山会館新ビル移転記念講演会・紹介〉



東京の新しい霞山会館で展示会と講演会

東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久

2007年11月27日（土）から29日（月）までの3日間、当記念センターは東京霞ヶ関に完成した国の官庁との合同ビルであるコモン・ゲート西館37階の新しい霞山会館のフロアで、東亜同文書院の展示と講演会を開催した。それは同時に愛知大学東京事務所が同じく37階に移転開設した記念行事への参加事業でもあった。

霞山会館は戦前から霞ヶ関に隣接する虎ノ門にあり、5000人近くの東亜同文書院入学生をここから上海へ送り出してきた。戦後は9階建のビルへ変身、その中に滬友会（東亜同文書院卒業生の同窓会）があり、のちに愛知大学東京事務所もこの3階に開設された。

それがこの地区一帯の再開発により、高層のツインタワーへ生まれ変わり、景観が一新し、地上37階の東京事務所からの視界は富士山から国会図書館、新宿方面、銀座方面へと広がり、愛知大学と東亜同文書院卒業生の方々の溜り場にもなっている。

初日の11月27日（土）は早朝から業者とわれわれ関係者が展示施設の設列や東京事務所へ保管していただいた展示物の配列を行い、開場の朝10時のオープンに何とか間に合った。10時には早くも展示会場へ入場者があられ、東京での反響の大きさを予感させた。

午後には武田学長や同窓会関係者の東京事務所の移転開設の式典が行われ、愛大や書院の同窓生が数多く出席され、式典が盛り上がった。

引きつづき、記念センター主催の講演会を行った。演者は折から『満州国演義』の長編を執筆しつつある作家の船戸与一氏が「小説『満州国演義』に見る中国大陸」のテーマで話された。満州国をめぐる舞台とそこで実際に動いた人物達を氏の視点から整理し、位置づけようとした内容で、終了後、満室の会場からは石原莞爾の思想や行動をめぐっての議論などが活発に行われた。その報告はブックレットとして当センターから出版されており、関心のある方はご参照いただきたい。

その後、懇談会が同フロアで愛大および東亜同文書院を中心としたメンバーで行われ、盛況であった。

翌28日（日）は、午後、李廷江中央大学教授が「近衛篤磨と清末中国」のテーマでの講演会を行った。李廷江教授は近衛篤磨の清朝の中央及び地方政府関係者との間で交された書簡などを中心に研究し、当時の日中関係史を中国側の視点から研究をすすめてきた。今回の講演会もそれをふまえた内容で、その講演内容は当センター年報に収録されているので、ご参照いただければ幸いである。

最終3日目、29日（月）も朝から来訪者が多く、夕方には東大の大学院ゼミ生も集団で訪れるなど、盛況であった。

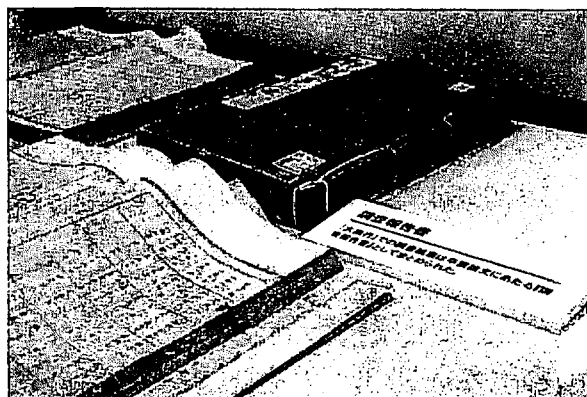
昨年、横浜では全国図書館展のメインに当センターによる東亜同文書院の展示を行い、総入場者数2.5万人のかなりの人が展示を閲覧した。今回

は単独事業で、しかも37階という高層の場所ではあったが、3日間とも多くの入場者が来訪し、東亜同文書院の関係者も数多く来訪された。明らかに全体として、実感としての東亜同文書院への関心の高まりを肌で感じるほどの反響があったといえる。なお、次年度は福岡（11月23～25日）

と弘前（7月26～27日）での展示と講演会を計画している。

以下、船戸与一氏の講演の概要と李廷江教授の講演内容を紹介する。

（文責 藤田佳久）



展示した中国大調査旅行の調査報告書



掛軸などをみる見学者達



船戸氏の講演会。会場一杯の盛況



講演する船戸与一氏